勤務医部会だより

まだ終わらないコロナ
ーナイチンゲールの叡智から将来へー

幹事　**富田保志**
(独立行政法人国立病院機構
名古屋医療センター　副院長)

新型コロナ感染症が、５月に５類に移行するまでは、「３密を避ける」ことを多くの人が実行していた、あるいは少なくとも気にかけて活動していた。現在、「３密」はほとんどマスコミなどで話題に上がることもなくなり、すでに過去の文言となった感さえある。

それに反して私自身は、先日、換気についての新型コロナ関連の講演を聴講し、あらためて新型コロナの院内感染予防には換気が重要であることを再認識することになった。講演の中でナイチンゲールの話題もあり、全く知識を持ち合わせておらず、新鮮に感じたことがあった。ナイチンゲールの代表的な著書「看護覚え書」の第１章は換気と保温に関しての著述であり、良い看護が行われているかどうかを判定するための基準として≪患者が呼吸する空気を、患者の身体を冷やすことなく、屋外の空気と同じ清浄さに保つこと≫とされていることである。200年近くも前から換気が重要とわかっていたのである。

ナイチンゲールの著述について、看護職においては、ほとんどの人が周知のことであると思うが、医師、あるいは他のメディカルスタッフの方々にはあまり知られていないのではないだろうか？　患者に寄り添う、患者に最も近いメディカルスタッフは、看護職である。多職種によるチーム医療の重要性が様々な場面で唱えられているが、患者・家族を中心としたチーム医療を実践するためには、看護職以外のメディカルスタッフもナイチンゲールの考え方から学ぶものは多いのではないかとも思う。

５類移行後の現在でも新型コロナは院内感染からクラスターにつながることがある。他方で、今年はインフルエンザも大流行し、当院にも入院となる患者は昨年より多い。しかしながら新型コロナよりインフルエンザの実効再生産数が低いためか、新型コロナのようには院内感染にはつながっていない。インフルエンザと比較してみると、新型コロナの感染性は、やはり脅威的である。現代にナイチンゲールがいたとすると、その知性と実行力でどんな対応をしたのだろうか、想像したいのだが、全く凡人には思いつかない。とにかく今後も新型コロナの感染性が低下しない限り、医療機関は引き続き十分な換気を中心とした感染対策が求められ続けることになるのだろう。

コロナ禍中に、1995年の米国映画「アウトブレイク」を再度見る機会があった。アフリカ、ザイールの村で出血熱が流行し、多くの犠牲者が発生するという設定である。以前観た時には気づかなかったが、接触感染、飛沫感染、空気感染など、新型コロナ禍で、よく耳にした内容も盛り込まれており、30年近く前に作成された映画ということに驚かされた。その映画は、「人類の優位を脅かす最大の脅威はウイルスである　ーJ. レダーバーグ（ノーベル賞）ー」という字幕で始まる。

新型コロナ感染症パンデミックの初期段階では、コロナウイルスは、まさに人類の脅威であったといえる。当時、高齢者のみならず、比較的若い年代の人々が亡くなっていったことを、私たちはもう忘れかけていないだろうか？　マスクやアイガードなどの個人防護具の不足もあった。スタッフが濃厚接触者になったり、感染したりと、戦力から外れることも多かった。まさに災害医療にも似た状況だったとも言える。平時にも、時々、振り返って記憶を新たにし次世代の医療者に伝えていくことが重要と考える。今後も出現するであろう新たなウイルスとの戦いに備えて。

参考図書

フロレンス・ナイチンゲール　「看護覚え書（第８版）」，訳　湯槇ます，現代社